認せざる、得ない。將來の社會の人類が、野蠻人及び未開人の特性たる感覺の完全と強健とを回復するには、搖籃の中から始まつて一生を通じ、且つ數時代に亘つて、繼續せる教育を要するであらう(註二)。野蠻人や未開人に對して、俗人輩が現はす懦弱な侮蔑の念を有せざる、稀有な人類學者の一人モルガンは、野蠻人種に關して集積された豐富な、且つ屢々反對の材料を、初めて論理的の順序に分類し、そして有史前人類の進化の第一輪廓を通つた人であつた。彼は曰く、『人類進化の總計に比すれば、野蠻時代に於ける人類の進歩は、未開時代の三時期に於けるよりも大で、また未開時代の同時期に於ける進化は、同じやうに、文明時代の同時期に於けるよりも大であつた(註三)。』文明社會に移された野蠻人、又は未開人は、見るも哀れな者であつて、その天賦の良質を失ひ、文明人の疾病に感染し、文明人の惡德に浸潤する。けれ共、希臘人や埃及人の歴史は、未開な人民が適當な境遇に置かれ、そして自由に發達された時は、如何に驚くべき物質的、及び知識的發達の程度に、達し得るの資格ある者なるかを、吾人に示して居るのである。

註二　現代の頌詞作者が、その多少の觀察力を認めて居るシイザアは、彼が敵として戰へる未開獨逸人の、肉體運動の力と熟練とを、倦まず賞讃して居た。彼等に對するシイザアの歎賞の大なる、フエルシンゲトリクスに率ふるゴール人の、勇猛敢爲なる抵抗を壓倒せんが爲めに、ライン河を超えて獨逸から、彼等の間に交戰する爲に用ひられて居た、騎兵と輕裝步兵隊とを召し寄せた。そして彼等の騎馬が、何れも貧弱で物の役に立ちそうも無いので、シイザアは監軍、勳爵士、及び古強者等の騎馬を召し上げて、之れを獨逸人の間に分配した位であつた。

註三　ルキス、モルガン著「古代の社會」第一部第三章「人類進化の比率」。

文明社會の生産者は、資本家がその豪華な奢侈に耽るの手段を、獨占して居るが爲にのみ、その最も痛感せる要求欠乏を滿足させる爲の個人的財産をば、最少限度に減せられて居る。資本家にして、その戸棚に充滿せる帽子や靴を、一時に用ひやうとしたならば、希臘神話へカトンチリ（百頭百肢の怪物）のやうに、百頭百足を有たなければなるまい。故に、若し平民階級が、私有財産の欠如の爲に苦しむとすれば、資本家は却つて之が過剩の犧牲となつて居るのである。種族を墮落頽廢せしめつゝある、彼等を抑壓する倦怠や、彼等を呑噬する疾病は、快樂の手段の過剩の結果に外ならない。

b 勞働用の道具たる私有財産。フランクリンの定義によると、人間は『道具を作る動物』である。人類をその祖先たる、獸類から區別する所以のものは、卽ち道具の製造である。猿は樹枝や石塊を利用するが、武器や道具の製造の爲に、硅土を採掘した動物は人間だけである。だから、岩窟や地質學的地層に於ける石器の發見は、人間の頭蓋骨そのものと同じやうに、人間が生存して居たと云ふ積極的な證左である。勞働用の器具、野蠻人の硅石小刀、大工の鉋、外科醫のメス、生理學者の顯微鏡、或は農夫の鋤、是れらは悉く人間の要求の滿足を容易ならしむる爲め、人間の器官に對する補助附屬物である。

小規模の手工業が行はれて居た間、自然生産者はその勞働用の器具の所有者であつた。中世紀に在ては、職人はその離した事の無い器具箱をかついで旅行した。鄕士は私有財産の成立前にすら仕切つて割當てられた小土地を一時所有して居た。中世時代の農奴に至つては、其處から到底離るゝ事の出來ぬ程、その耕作した土地とは、密接に聯絡して居たのである。

勞働用の道具とは、今尙、この私有財産の多くの痕跡が存して居るが、然しそれは迅速に消滅し